

# 家庭科

## 1 育成したい「思考力」

- a 生活事象を様々な観点から多面的に見直し，総合的に捉える力
- b 自分の生活とのかかわりで生活事象を捉え，転移・活用していく力

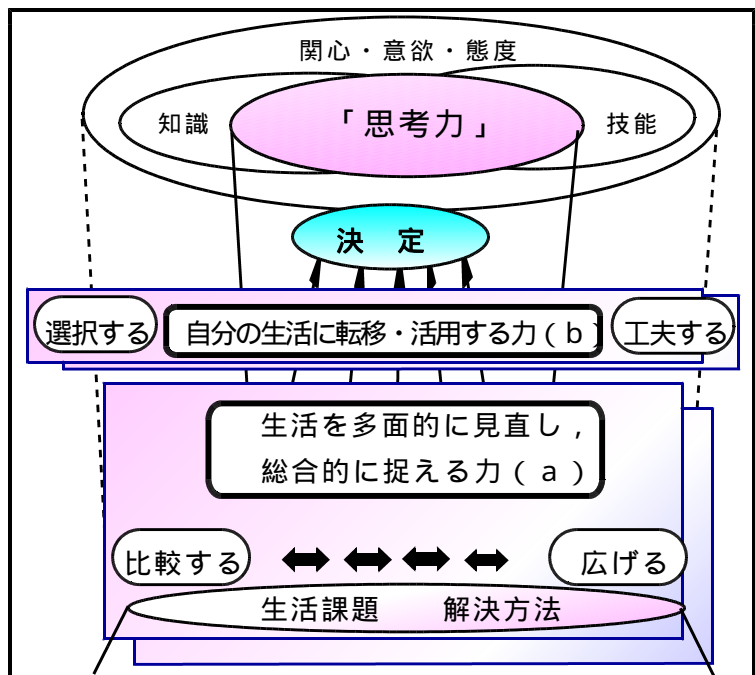
文部科学省は家庭科の学習において育成すべき「思考力」は「生活を創意工夫する能力」であり、「家庭生活について見直し，身近な生活の課題を見付け，その解決をめざして考え自分なりに工夫する能力」としている。すなわち，自分の課題を発見し，その解決に向けて経験を生かしたり他者とかかわったりしながら多様に解決策を広げていき，その中から自分や自分の家族の生活状況に合う方法を選択したり，新たな工夫を加えたりしていく能力であると考えられる。

本校家庭科では，これらの能力を「生活を多面的に見直し，総合的に捉える力」「自分の生活とのかかわりで考え，転移・活用していく力」と捉え，これらの「思考力」を育成することで様々な生活事象や他者と共生しながらよりよい生活を創っていくことができると考えた。

a「生活を多面的に見直し，総合的に捉える力」とは，1つの生活事象に対して，複数の課題や解決方法を見出し，それらを様々な観点から見直し，価値を捉えてよりよいものを見極めていくことである。よりよい決定を見出すためには，課題に対して生活経験や既習の学びを基に見通しをもち，他者とかかわり合いながら解決方法を広げることが求められる。そして，その多様な解決方法の中からよりよいものを選び出すとき，長所・短所の両方から比較しながら分析していくことが要求される。

b「自分の生活とのかかわりで事象を捉え，転移・活用していく力」とは，多様な価値を受け入れながらも，決定に当たっては自分の生活にとって最も適していると思われるものを選択したり，自分の家庭生活の状況と照らし合わせてよりよいものに工夫したりしていくことである。

例えば，飲み物を決定していく場合。果汁100%の飲み物は健康の観点を見ると良いと客観的に捉えることができる。しかし，これだけではなく，「自分の家族は人数が多いから，経済的で量の多い他の飲み物を選択しよう」「果汁に氷水を加えて量を増加させる工夫しよう」と状況を考え決定していく様相である。



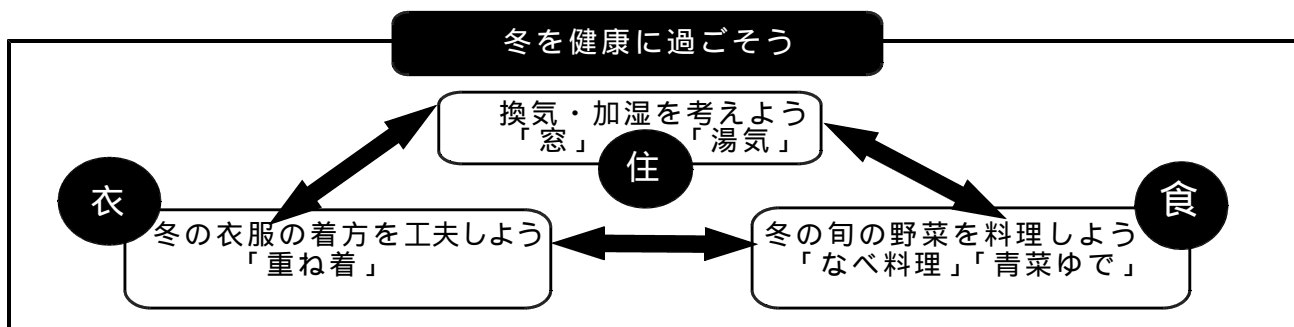
【2つの思考力】

## 2 「思考力」を育成する単元編成

### (1) 課題や工夫が見出しやすく，思考への意欲を高める教材開発

自分の生活を多面的に見つめ，そこにある解決し，自分の生活に転移していくためには，課題が子どもたちの生活と深いかわりがあり，切実なものであることが必要である。そのためには，子どもたちが生活を実感できるように季節や行事の中の課題を教材に取り上げることが有効である。

下図は，冬という季節，寒さ・乾燥対策という課題を中核に衣食住を関連させて構成した『冬を健康に過ごそう』という単元である。



「寒いなあ。どうしたら暖かく快適に（乾燥対策）過ごせるのだろう。」という1つの課題を衣食住の生活から解決していく。乾燥しがちな部屋（住）を加湿する工夫の一つとしてなべ料理の湯気を見出す（食），そして体温が上昇してくると衣服を一枚取り，調整すること（衣）など体験をもって理解していく。

このように季節や行事と関連させた教材を開発することは，自分の生活との深い関連があるため，課題や解決のための工夫を見出しやすく，思考への意欲を高めることができる。また，生活のつながり，人ともとのつながりを意識できるため，生活を分化させずに総合的に捉える考え方を身に付けることができると考える。

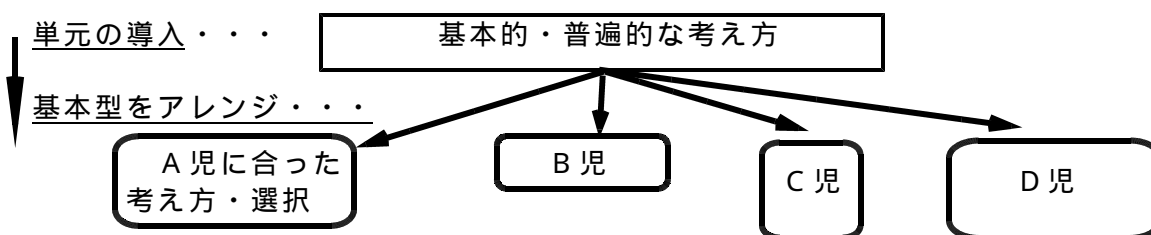
本校家庭科では，この他「大掃除をしよう」（掃除，再利用，家族のふれあい）「修学旅行の準備をしよう」（ナップサック作り，計画的な買い物の仕方）等，季節や行事と繋いだ教材を開発している。

### (2) 普遍的な価値観から自分流の価値観を形成していく単元展開

#### 基本型をアレンジする場の位置付け

家庭科学習においてはものごとを決定していく過程において，基本的・普遍的な考え方を理解した後，「わが家」「自分に合った」という自分流の価値観の基，決定していく考え方が大切である。

そのために，単元の導入は基本的・普遍的な考え方を身に付け，その後自分の生活に合った工夫を導き出していく単元展開が望ましい。



そのため例えば，ハムや飲み物などの朝食の材料を買い物する場面，袋や小物作りに使用する布を選択する場面，何品かの食品から選択して一品を作る場面等，比較して選択する場面を導入するとよい。

ハムを購入する場合，まずは何品かのハムの賞味期限や内容量，値段，原材料等を比較しな

から食品購入のポイントを学んでいく。そしてどれを我が家は購入するかとなると、どのポイントを優先するかによって価値観が異なり、思考する必然性が生まれる。そして、友達と選択した食品について吟味し合うことによって、他者の決定理由から多様な価値観を学ぶこともできる。それは、自分の価値観を再形成していく契機ともなり得る。

#### ジレンマ場面を通しての意思決定

自分の生活場面において物事を決定していく際、その物事同士を比較しながら自分の生活との関係で捉えていく力が必要となってくる。そのためには単元内に、身近でどれかに決定しなければならない具体的な生活場面を設定することである。

課題としては「本当に綿はいいのだろうか。」「玄米と白米、どんなごはんを炊きたい?」というように自分のこれまでの生活実態と新しい情報との間でジレンマに陥るような課題を設定することである。

例えば下着を選択する場合、幼い時から「綿はよい。」ということを経験上見出している子どもたちにとっては価値観を揺さぶられるような教材である。「綿は汗をかくと乾きにくく、そのままにしておく」と風邪をひくこともある。」という情報との出会いによって「どんな素材の下着を着ればいいのだろう。」というジレンマが発生する。このような学習を通して、相手や状況に応じた選択が必要であることを学んでいくのである。



このような決定場面を単元内に設定することによって、物事を決定する場合には多面的に物事を見つめ、選択しながら、自分の価値観に合うものを決定していく力を育成することができるであろう。さらに、「自分の中で確立していた考え方を他者の考えや情報とすり合わせながら新たな価値観を形成していくことがよりよい生活を創り出すことになる」という思考様式を獲得していくことができるのである。

### (3) 五感を大切にした体験的な活動と思考の場とのサイクル化

#### 課題発見の場や解決過程で思考を促す体験的な活動の導入

課題を見出すための思考を手助けするためには、多様な疑問が生じる体験的な活動を取り入れることが必要である。さらに課題を解決していく過程においても、体験的な活動は実感を伴った解決になり、そこからまた新たな思考が働くのである。

例えば、シミュレーションという体験的な活動を導入することで、生活経験の少ない子どもたちに生活事象に関心をもたせ、疑問を見出させていくことができ、それは思考活動への意欲に繋がる。ここでは「みそ汁づくり」の学習において述べる。単元導入では、みそ汁作りをシミュレーションしながら生まれる疑問をピックアップし、課題へと繋ぐ。「いりこは、いつからつけておくの?」「かつおぶしの場合は?」「だしをとる時間はどのくらい?」「ふたはするの?」等。

そして、解決していく過程でも「いりこをつけておく時間とだしの違い」「材料の違いによる味・風味の違い」等を比較実験しながら自分の舌などを使って確かめ、色、香り、味、食感の五感という視点から解決していく活動を取り入れた。

そうすることで、思考活動の成果が子どもに実感され、今まで意識していなかった生活の中の調理の工夫の意味を意識し、「どんなブランドのだしがおいしいのだろう。」と他の生活事象に関心をもつ機会となり得るのである。



## 思考様式のサイクル化

前記の「だし」の学習の後，みそ汁の構成要素である「みそ」「汁の実」の学習において「だし」の学習で培った解決の仕方や決定の仕方などの「思考力」を転移させていく。このように体験的な活動と思考の場をサイクル化させることで，実感を伴った「思考力」が確実に身に付くようになるのである

教材 a (だし) → 教材 b (みそ) → 教材 c (汁の実)

### (4) 比較の観点が増えて判断が段階的に複雑になっていくような教材の配列

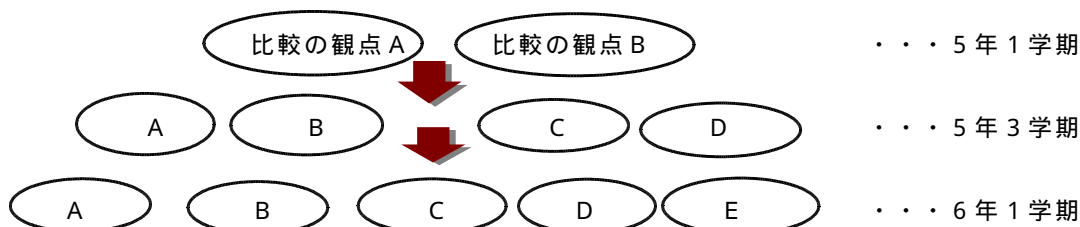
前記の a・b の「思考力」育成において，まず「比較して選択する」，次に「いくつかの要素を組み合わせる」「新しいものを創り出す」という「工夫する」段階があると考えている。

2 年間では以下のように教材配列に段階性をもたすことによってより効果的に高められると考える。

生活に関する構成要素が増えていくように，選択肢を増やしていく

自分や家族に合った選択ができるように，自分や家族に関する要素を増やしていく

数少ない観点から，次第に自分や家族の好み，健康状況など新たな観点が加わってくるように教材配列を考える。そうすることで，既習の考え方が定着し，それを生かしていく学習ができる。選択肢が増えていくことで，比較する観点が増えて判断が難しくなる。そこで，意思決定するための比較という思考が働く。



例えば，生活に役立つ物の製作における「布の選択」場面を例に挙げる。

5 年 1 学期の「ランチョンマット作り」では，初心者にも縫いやすい布を教師が選択しておき，縫いやすさを考える必要がないようにする。つまり，ダイニングの「雰囲気合う色」とか「皿が映える色」という 1 つの観点到絞ってから選択できるようにする。

5 年 3 学期の「袋作り」では，「丈夫さ」と「縫いやすさ」という観点を新たに加える。

6 年 1 学期の「サマ - ワ - クウエア - 」では，さらに「通気性」や「吸収性」という科学的な見方や考え方，家族の が使う「家族の好み」という観点を加えるなど，判断・意思決定がより複雑になるように，教材の配列を考える。

このような段階的な配列によって，前単元でのものの見方・考え方を生かしながら，次単元ではより細かい観点から捉えたり，それぞれの観点を繋いで考えたり，どれかの観点を優先して決定したりする考え方を身に付けることができる。

すなわち，比較の観点を増やししながら，判断・意思決定を繰り返していく教材配列によって，ものごとを捉える多面的な見方や決定する際の自分の価値観を確実に築いていくことができるのである。

### (5) 個に応じた指導の充実 発展的な学習

問題解決を図るためには，質的に高い「思考力」が必要になり，発展的な学習を導入する場合もある。

例えば，家族の健康状況を考えたメニューを考える学習の場合，そのための情報として小学校段階の内容「3 つの栄養バランス」からだけの思考では不十分なため，中学校の内容である「その年代に応じた栄養摂取」を取り入れながら解決に向かうようになる。それは，家族を思い，それを形にしたいという子どもの願いを実現しようとする学習である。